国際児童年1979年

丈夫な頭のよい子に育てよう

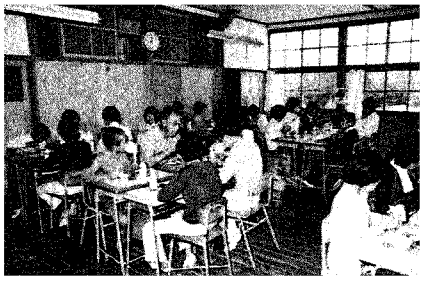
10月は食生活改善普及運動月間

国際児童年に寄せて

都留二中PTA会長
高部正三

人間らしく生きる為には若者は良き人生の演出家たれ。

私達が子供の頃は、教育ママが居なかったせいかあまり勉強しろという話は聞かなかった。そのせいか部落中の子供が広場に集まって色々な遊びをした。年長者が小さな者を統そつして遊びの内から道具の使い方、小刀、ノコギリ等親からでなく仲間同士で遊ぶ為の生活の知恵として身につけていった。その結果連帯意識が高められ、一つの遊びの文化が部落、村落単位として育っていった。我々はそれを引継ぎながらも遊びを絶えず創造していった。人はよく人間性の問題を話すとき、ナイフと鉛筆けずりを例に出すがこれはあまり賛成出来ない。人間とは与えられた文化や文明をそのまま受け継ぐだけでなく、絶えず創造してゆく事に意義があり主体性を持つ事だと思う。人は情報の量で人間の価値を決めたがるが情報の多い少ないはコンピュータそのものの価値であって人間の価値ではない。コンピュータは情報量に物をいわせ色々な物の処理能力は優れているが与えられた情報に対してのみ処理をして創造する能力は持っていない。自己を確立し主体性を持って生き、自ら創り出す人生こそ人間の本来とすべきだと思う。高度に機械文明が発達していっても自己の価値観を持ち、常に創造してゆく者が即ち他人から演出され与えられた台本による人生より自らそれぞれの持つ才能、能力に応じた人生を演出する演出家である。



大人と子どものあいだに……

都留二中教諭
武井重雄

「いまの子どもは根気がない」「いや、わがままだ」「だから非行など、いろいろな問題がおこるのだろう」――このような声をよく耳にします。

たしかに、子どもたちには欠点もあります。だが、多くの良い面もあるはずです。

「大人って勝手だなあ……。自分たちの都合のいいように、言ったり、したりしている」

こんな子どもたちの声も、胸にひびくように聞こえてきます。

いつの時代でも、子どもの生きかたに影響をあたえているのは、その社会における、大人たちの生きざまです。

世にいう青少年問題も、つきつめれば成人の問題なのです。

ことに思春期になり、心身に微妙な変化をみせる中学生時代にあっては、なおさらのことです。

子どもと語りあい、理解しあうなかで、生きる方向を共に見出そうという態度が、大人へ一歩近づく時期の中学生にとって、最も望まれていることなのです。

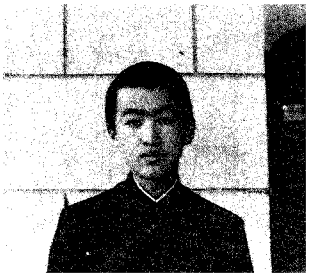
国際児童年は、「子どもが元気に育っていくように、世界じゅうの人たちが気をつけなければいけない」ということを、みんなに知ってもらうために、国際連合の総会できめて宣言したものです。

今年こそ、世界の子どもの幸せを考えるとともに、身ぢかな事がらに、より一そう目をむける機会にしたいものです。

国際児童年に寄せて

都留二中生徒会々長
奥脇経三

今年は、国連で「児童の権利宣言」を採択して以来二十年をむかえ、「国際児童年」という素晴らしい年に決められました。この国際児童年をむかえるに当たって、まず過去の自分を振り返ってみたいと思います。



僕は、生まれた時から豊富な食料、衣料などに恵まれ、教育面でも小学校の六年間の義務教育生活を無事に終り、現在、第二の義務教育生活である中学校生活においても、たくさんの友達にも恵まれ、何の問題もなく生活しています。しかし、世界のどこかには、食べ物も満足に食べられず、非常に不自由な生活をしている児童がたくさんいます。このような人達に比べれば、日本の児童は恵まれすぎているかもしれません。この「児童の権利宣言」のどの文の書き始めも「すべての児童は」と書き出されています。なのに、このような生活の差が生まれることに社会の矛盾を感じます。この生活の差がなくされ、世界の児童が本当の幸せを送れる日が一日も早く来ることを願い、自分もこれからの福祉活動に更に力を入れ協力したいと思います。